

日本近世木簡研究の課題

— 日本古代木簡研究と比較して —

鐘江宏之

論文要旨

日本近世の木簡は、都市での発掘調査によって見つかった遺跡を中心に出土事例が増えている。しかし、その研究はなかなか進んでいない。その要因としては、さまざまな点があげられる。古代の木簡を中心に発展してきた木簡学の成果はあまり反映されておらず、調査報告での扱われ方も改善すべき点が多い。また個々の木簡資料を検討していくためには、早期に近世木簡の体系を考えていくことが重要な課題となる。古代の木簡ではなく、中世の木簡の研究を参照しながら、体系を考え、継続して検証していくことが必要である。現在の歴史研究の上では、絶対年代を知ることができる点などが活用されているが、木簡資料の大部分は日常の廃棄物であり、その時代の日常を解明するために役立つ資料と考えられる。今後の研究の方向性として、そうした日常を解明することが事例研究に求められる。

キーワード【木簡、江戸時代、出土文字資料、日常生活、調査報告書】

はじめに

筆者は、文献史料を中心とした日本古代史研究の一環として、日本古代の木簡を対象とした研究にも取り組んできた。日本古代の木簡やそのほかの出土文字資料についても調査に携わった経験を持ち、遺物としての出土文字資料に対して、どのような点に注目してどのような情報を引き出すことによつて、歴史を考える上で貴重な資料となり得るのかということ、常に配慮しながら調査に関わってきたつもりである。¹⁾ 歴史研究における日本古代史の分野は、伝存する文献史料の量が限られており、またその量も新しい時代に比べれば少ない。さらに、古代から数百年から千年以上も経た現代では、伝存されてきた史料もおおむね見出され尽くしており、伝来してきた古代の文献史料が新たに発見されるということもあまり期待できな

い。こうした状況下にあつて、発掘調査によって見つかる出土文字資料は、新たな発見の期待できるものとして、日本古代史の研究者からは常に注目されてきた。それらの中でも木簡資料を使った研究によつて、国家支配機構の末端のあり方や、賦課物品徴収の実態、さらには家政機関の経営の様相など、伝存してきた文献史料だけではわからない歴史上のさまざまな面が明らかにされてきたのである。

一方、近年の遺跡の発掘は、現代の都市部の再開発地などでも多く進められており、現代の都市域と重なる近世都市の実態が、遺跡ごとに明らかにようになってきている。こうした近世都市の遺跡からは、当時の社会のさまざまな廃棄物が出土し、その中には出土文字資料も多く含まれているのである。しかしながら、伝存する文献史料が膨大に残されており、それらを使った研究が主に進められている日本近世史研究においては、木簡を利用するまでもなく文献史料で明らかにされる内容がまだ多くあり、現状では木簡を主に取り扱った研究はまだほとんど無いに等しい。

本稿では、こうした研究の現状を整理した上で、日本近世の木簡を対象とした研究が持つ可能性と、近世木簡の研究が進展していくための課題について、要点を提示していくことにしたい。

一 近世木簡の調査報告の現状

近年の都市部の再開発などに伴い、近世・近代の遺跡の発掘調査

も多くなつてきた。江戸時代以来の都市は現代でもその上に都市が造られていることが多いのであるから、これは必然の結果である。東京で発掘調査をすれば近世の江戸の遺跡が、大阪で発掘調査をすれば近世の大坂の遺跡が、金沢で発掘調査をすれば近世の金沢の遺跡が見つかる。そしてそれらの遺跡は、その後の現代に至るまでの痕跡を残しつつ、近世から近代までのその地の変遷を物語る。中には中世まで遡るといふ場合もあるであろうが、近世になつて都市化した地域の場合、その本格的な開発は近世に始まることが多いだろう。さらに都市部におけるこれらの近世遺跡の地層の上には近代の遺跡が重なつていくことも多い。近代遺跡からも多くの資料が出土しているが、それらの中における木簡の実量は、近世遺跡に比べればまだはるかに少ないようである。本稿ではまず近世の木簡に焦点をあてて述べていくことにし、近代木簡についての検討は別な機会に譲ることにしたい。

近世の都市遺跡では、人口の集住を反映して多くの遺物が出土するが、それらの中には出土文字資料も多く含まれている。一般的には、発掘調査などによつて出土した遺物のうち、文字の記されているものを出土文字資料と称しているが、近世遺跡から見つかる出土文字資料には多種多様なものが含まれている。陶磁器や木製品をはじめとするさまざまな用具・道具類から、建築部材のような部材類、そして文字を記して伝える筆記媒体としての木簡など、種類においては古代の出土文字資料よりもはるかに多様であり、古代社会には

見られない種類のものも多い。そのことはまた、古代から近世において用具・道具・建築部材・筆記媒体などが発展した結果であり、発展を遂げた近世社会のあり方に即した研究が求められてもいる。

近世遺跡から見つかる出土文字資料には、その素材ごとに分けるとおおよそ次のようなものがある⁽²⁾。

陶磁器や素焼きの焼物に文字が記されたり印の捺されたもの

金属製品に文字の記されたもの

木製品や木製の部材に墨書・漆書や印の捺されたもの

紙に記された書類等が何らかの理由で地中に残されたもの

しかし、これらは文字資料としての枠組みよりも、それぞれの遺物の材質による枠組みである陶磁器・土製品・金属製品・木製品といった分類に、別々に属して扱われていることが多い。つまり現在の近世遺跡の発掘調査報告書では、遺物をまとめて報告する際には基本的に遺物の材質を大区分とし、形態や用途をその下位の区分としている。文字の有無は、さらにその下の区分に過ぎない。

このことは、近世遺跡の報告書に限ったことではない。古代の遺跡についても、例えば墨書土器は他の墨書のない土器と一括して、出土した土器全体がまとめて報告されることが通常である。ただし、文字資料が出土することが多い古代の官衙遺跡などでは、遺物の材質による分類での報告とは別に、文字資料のみを抽出した一覧表や特別な考察などを付したり、報告書内の頁数の一部を割いて特論的に木簡や漆紙文書を扱うこともある。さらに、その遺跡にとつて出

土文字資料の位置づけが重要な場合には、出土文字資料のみを扱った単独の報告書が作成されることもある。宮都遺跡における木簡の報告書などはその代表例と言えるだろう。しかし、近世の遺跡に関して、出土文字資料が別冊で取り上げられて単独の報告書とされた例は聞かない。中世遺跡でも草戸千軒町遺跡などでは、木簡だけをまとめた報告書は作成されていたが、近世遺跡については皆無であろう。決して近世の出土文字資料の点数が少ないわけではない。現在の扱いとしては、近世遺跡からの遺物の中における出土文字資料は、古代の出土文字資料ほどの位置づけを与えられていないということである。

一方で、一部の種類の出土文字資料について研究が進められ、研究書としてまとめられているものもある。代表的な例として、刻印のある焼塩壺が考古学的な分析を中心に研究されており、刻印に見られる文字についてもそれらの考察の一環として言及されている⁽³⁾。焼塩壺は、古代における土器や瓦と同様な扱われ方によつて研究されていると言えるだろう。

出土遺物の考古学的なアプローチによる観察とデータの整理は行われているが、古代の木簡のように、文献史学において文字を釈読する技術をもつた研究者がほとんど釈読を進めているというような状況は、近世木簡の調査現場では少ないようである。近世文書の史料調査に練達した研究者が、より多く釈読に参画できれば、さらに高精度での釈読が可能になり、また紙の文書や典籍史料などと突

き合わせての内容の理解もより進むのではないかと考えられるが、現状ではまだそこまでの参画は得られていない。

こうした概況の中にあつて、近世木簡は、古代木簡や中世木簡ほどの位置づけを与えられないまま、一覽表での報告にとどまる場合が多い。結果として、釈文は一覽表の中に無理に押し込めることになり、改行や書き出し位置などを伝えることが難しい形態での報告となる。一覽表の形態もおおむね釈文が横書きになることが多く、実際には縦書きで筆記されていることとの違いから、表における記載の在り方の制約のために、木簡面における文字の割り付け方などの情報が活かされれない。非常に中途半端な扱われ方になつてしまう場合もある。総じて、一点あたりの情報をできるだけ多く伝えるというようには、扱われていないのが現状である。

このような現状は、たとえ木簡が大量に出土していても、それらがどのように考察されることによつてどのようなことが明らかになるのか、その資料として期待される面がまだまだ明らかになつていないということに、大きな要因があるだろう。しかし、こうした扱われ方は、一方で資料としての木簡の可能性を閉ざす結果にもつながつてきた。一点一点の木簡についての情報は、詳細に検討するためには報告書の表で記された内容では足りず、写真についてもかなり少数に絞られたものが抜粋され、小さく縮められた画像でしか載せられていない状態である。この報告書での状態では、そのまま研究対象として利用するにはデータが不足していると言わざるを得な

い。興味を持った研究者が木簡各点の資料についてより詳しく調べるためには、資料所蔵者に申請してより詳細な写真などを扱わせてもらうしかない。このように、現状では、研究を進めるためには非常に障壁の高い状態になつてきているということができる。

二 近世木簡研究の進展の可能性

筆者は、自身を中心にして試みに近世木簡を研究するグループを立ち上げ、科学研究費補助金の助成や学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクトの研究費を受けながら、近世木簡の研究のあり方を模索してきた。そのあり方は、大きく二つに分けることができる。一つは、報告書の内容から知られる木簡資料についての知見を検討することであり、もう一つは、実物を実見して近世木簡資料の検討の経験を積み、そこから近世木簡の研究の可能性をさぐることであった。これらの機会ごとに、日本古代の研究を対象に発展してきた木簡学の分野に精通した研究者、日本近世都市史に精通した研究者、日本近世を対象にした歴史考古学に精通した研究者に、共同研究のメンバーとして加わってもらい、資料の検討を重ねてきた。

まず、発掘調査報告書においてすでにデータが公表された資料に対して行つてきた検討について触れておきたい。筆者を中心とした研究グループは、近世木簡による事例研究が進めやすいと考えられる、多数の出土点数がある遺跡にねらいを定め、一九九〇年から二

〇〇〇年にかけて調査が行われた港区の汐留遺跡出土の木簡群を対象に選んだ。⁴ 汐留遺跡は旧汐留貨物操車場跡地の再開発にともなうて発掘調査が行われた遺跡であるが、その地には江戸時代には龍野藩脇坂家・仙台藩伊達家・会津藩保科家の大名屋敷が並んでおり、明治時代になるとその跡地に旧新橋停車場が建設された。したがって、江戸時代の大名屋敷の遺構から出土した遺物とともに、近代の旧新橋停車場跡の遺物も出土している。それらの中には近代の木簡も含まれているのだが、当面、近世の木簡に焦点を絞って研究会を開きながら検討を進めてきた。汐留遺跡の木簡群は、先に挙げた脇坂家・伊達家・保科家のいずれの屋敷跡からも出土し、また脇坂家と伊達家の間の境堀からも出土しているが、関連する文献史料に比較的恵まれているであろうと予測した伊達家の屋敷跡出土のものから先に取り組むことにし、このように目的を絞った形としてはこれまでに八回ほどの研究会における検討を続けてきた。

報告書に掲載された木簡の積文を読むという形で、検討を始めたのであるが、そのことを通して、それぞれの木簡に記された内容がどのようなものであるのか、またその木簡がどのような機能を持つものであるのか、といった点について、一点一点の検討を行うのが目的である。しかしながら、一点一点の木簡の検討はなかなか困難であった。理由はいくつがある。

まず、報告書において写真の掲載された点数が少ないことは、それぞれの木簡の文字を再度検証していく上では不利であった。木簡

の研究において、すでに報告書で公表された積文がその通りであるのかどうかを考えながら積文を検討することは、必要な作業である。基本的には報告書作成にあたって積読された結果を信用しながら利用していくことにはなるのだが、写真が公表されているものは、写真と積文をつきあわせて検証することが可能であるため、できるだけ詳細な検討のためにその作業にとめることにした。しかしながら、汐留遺跡の報告書においては、積文の公表された木簡の点数に比して、写真の掲載されたものの割合は非常に少なく、これは大量の遺物が出土した中で、写真の掲載量を限定せざるをえなかった事情によるものではあるが、実際の木簡の検討を始めてみると、このことが各木簡の記載内容を理解する上では障壁となる。

一つには、近世木簡の形態や書式のパターンがまだ十分に把握できていないため、一点一点の木簡について書式を考えながら進めなければならぬという点の困難さがあり、写真の掲載されているものとされていないもので、記載内容の理解にかなりの条件の差がある。この点、古代の木簡でも写真の掲載されないものはあるので、扱われ方は同じようなあり方と言えなくもないのだが、しかし研究の背景となる事情は大きく異なっており、近世木簡については、どのような記載内容と形態がどのような目的の木簡に見られるのかといったことや、それらの木簡の種類がどのような体系になっているのかといったことが、まったくわかっていないのである。すなわち、未知の資料群に、一から立ち向かっているかのごとき感がある。日

本古代の木簡については、すでにどのような体系に分類され、用途に応じたどのような形態をとっているのかといった点が、ほぼ認識として共有されている。日本中世の木簡についても、古代の木簡のあとを追って草戸千軒木簡などを素材に体系の構築が模索された。しかし、中世木簡の体系についての議論は、現在それほど活発ではない。こうした体系が構築されるためには、一点一点の資料を地道に読み解き、体系を模索しながら既読資料の点数を増やしていつて帰納的に体系を考えていくことが求められる。時間と労力との必要な作業ではあるが、そのことを経て初めて、近世木簡とはどのようなものであるかがわかってくることになるだろう。筆者を中心にした研究グループも、こうした経験を地道に積み重ねている途上と考えている。

古代の木簡と違い、近世木簡に記された情報には、藩内の社会からの影響がかなり大きいことも近世木簡の特徴であるかもしれない。郷土色といえばそれまでだが、藩内独特の用語があり、地域の社会のさまざまな運営の仕組みがある。近世の木簡に見える用語には、そうした近世社会での地域ごとの特性が如実に反映されていると考えられる。もちろん、古代の木簡にも地域性はあり、記された用語に地域的な偏りがある可能性は考えられ得る。しかし、古代社会においては文字記述したいが汎用性を期待された技術であり、古代社会の中での木簡は、地域ごとの差がありながらも共通する要素を基に理解を進めることがしやすいと考える。それに対して、近世木簡

の中の世界は、全国的に共通する書体でありながらも、地域特有の用語の存在を前提にしないと、すなわち地域固有の用語を知つていないと釈読すら難しい場合がありそうである。たとえば、仙台藩伊達家屋敷跡で出土している木簡に見出される用語は、仙台藩の中で独特に使われていた用語である可能性もある。近世史料の中ではそのようなことも想定され、江戸の大名屋敷で出土した遺物でも、江戸と国元との知見を総合して理解していかなければならない。筆者の研究グループでも、仙台藩についての知見が豊富な研究者に協力を仰ぐ必要があつた。

詳細な検討は、写真の掲載されているものを中心に行わなければならないが、写真による検討だけでも、再釈読による検討を考えるべきかと思われる事例は多数あつた。報告書の段階では膨大な数の木簡の釈読を限られた時間で行つていたと考えられ、そうした条件の中での努力に敬意を払いたいが、しかし、釈読のあり方が変われば、さらに解明される部分も出てくる。古代の木簡でも、最初の資料調査の段階で一度釈文が公表された後も、他の遺跡から資料が新たに出土したことにより、それとの比較で釈読がより進んで釈文を改めることになった事例もある。『木簡研究』誌上では、研究の進展や再調査によつて釈文を改めたほうがよいという結論になつた資料について、毎号に「釈文の訂正」という欄を設けて、全国での釈文訂正の状況を報告している。木簡資料は、一度の調査だけで簡単に釈文の定まらないものも多く含まれているのであり、そうし

た再度の検証を経る中で資料の価値が新たに見出されるものもある。

また、これまでの近世木簡のおかれた調査環境は、考古学の研究者が釈読してしまいか、あるいは近世史の文献を扱う少数の研究者が釈読を依頼されて釈読するという形で済んでいたようである。しかし、木簡研究が進んでいる古代木簡の研究者から見ると、近世木簡の調査の現場にも、まだまださまざまな有用な知見を提供できるのではないかとの感が強い。現在の近世木簡調査は、近世史料（近世文書）の釈読という技術からは検討されて釈読作業が行われているが、木簡学の立場から検討すべき要素がまだ反映されていないと考えられるのである。

本稿では、具体的な釈文をどのようにするべきかといった個々の資料についての検討結果は省くことにする。研究成果をどのように活かしていくことができるかは、資料所蔵者との間での協議を必要とする。また、筆者たちの研究グループで再検討できている資料の割合が、資料群全体の中で決は必ずしも多くないことから、まだ継続した検討が必要である。

以上のような既に公表されている報告書でのデータを使った検討に加えて、筆者の研究グループでは実物調査も行つて、近世木簡の研究においてどのような問題点があるのかを、それらの調査を通して考えることも進めてきた。それらの中で、すでにまとまった出土があり報告書も出されている大阪市の大坂城下町跡、住友銅吹所跡、広島藩大坂蔵屋敷跡で出土した木簡群について、大阪市教育委員会

のご厚意を得て、保存処理を経て保管されている実物を拝見する機会を得ることができた。

大坂城下町跡から出土した木簡は、主に魚市の活動に伴う荷札であるが、年代の差のあるグループがあり、それらの違いなどもすでに考察されている。魚を扱う際の荷札のあり方という点では、江戸などの木簡においても参考になることがあるはずである。また、広島藩蔵屋敷の木簡は往来の船から落ちた荷札なのか、あるいは近くで廃棄されたものが流れ込んだのか、隣接する鳥取藩の荷札も混じり込んでおり、それらのうちになお読み込める部分があるのではないかと考えられた。鳥取藩での蔵米の収取を考える上でも貴重な資料となる可能性がある。こうした点は、古代の荷札木簡であれば、荷札木簡のみから当時の流通状況を導き出さなければならぬ場合が多いと考えられるが、近世の場合、鳥取藩の米流通に関する史料と対比させながら考えていくことで、さらに多くの点が明らかになっていくと期待される。近世木簡は、さまざまに残されている近世史料と併せて考えていくことによつて、古代木簡よりも豊かに考察を進められる可能性を持つているのである。

なお、江戸の木簡については、その調査や保管の現場についても訪問して、現状を把握することにとめた。現在、東京都二十三区内での遺跡は、東京都埋蔵文化財センターが各区の教育委員会が主に発掘調査と遺物整理に携わっている。しかしながら、木簡の調査に関しては調査担当者の献身的な努力に支えられている部分が大きい

い。さらに、保存処理については、大量に出土した場合にはそれらを保存処理する経費もかかり、区単位でそれをまかなうのはかなり厳しい現実もある。

調査にあたって、すでに文字資料としての木簡が出土した際に、文献の研究者が釈読に携わる体制がとられている場合も多いようであるが、日本近世史の研究者だけでなく、木簡学の蓄積を反映させる上では、違った時代の木簡であつても木簡調査の経験のある研究者の知見を入れていくことが、現在の研究状況では有効なのではないかと考える。現段階では、古代の木簡の調査で培われた視点の応用は、あまりなされていないように思われる。近世史研究者と古代の木簡で鍛えられた木簡学の研究者が共同で調査にあたるうちに、木簡学の知見は共有され、近世史研究者もモノとしての木簡をとらえる見方からの多様な視点での観察を試みるようになり、木簡資料の特性を活かした研究が近世木簡を対象として生み出されてくることが期待される。今後、木簡研究のために立ち上げた筆者らの研究グループが、出土した段階での調査にも貢献できるような方向へ、力を振り向けていく必要があるだろうと考えている。

三 今後の課題

江戸の遺跡の発掘調査が積み重ねられてきた中で、その概況を説明した書物では多くの遺物が紹介され、モノから当時の社会のリア

ルな姿が提示されてきた。しかし、一九九〇年代までの認識を反映していると考えられる二〇〇一年刊行の江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』⁽⁵⁾の中では、江戸の遺跡から出土する木簡は、まだ木製品の中の文具の一部という位置づけしか与えられておらず、「付札」の用語は使われているが、「木簡」という用語は使われていない⁽⁶⁾。たしかに、遺物そのものを客観的に分類する中では、そのように分類することも必要であり、文字の有無にとられず全ての遺物に対応した上での位置づけであつたと言えるだろう。

その後、木簡の歴史資料としての有用性は、一部の遺跡についてクローズアップされていくこととなつた。東京大学構内遺跡において、医学部附属病院中央診療棟地点の調査で見つかった大形の不整形遺構から大量の遺物が一括廃棄資料として見つかったが、その中に「寛永六年三月十九日」と記された木簡があつた⁽⁷⁾。この遺構が加賀藩邸内にあることから、寛永六年（一六二九）四月二十六日に行われた將軍家光の御成、もしくはその三日後の大御所秀忠の御成に伴う饗宴の際の、一括廃棄遺物であることがわかったのである。このような木簡による成果は、江戸遺跡の研究の中で認識が共有され、二〇一二年刊行の古泉弘編『事典 江戸の暮らしの考古学』⁽⁸⁾では、「木簡」の用語を用いつつこの一括資料群の紹介がなされている⁽⁹⁾。また、同書では、江戸時代に南町奉行所の所在した地にあたる有楽町二丁目遺跡で見つかった、「大岡越前守」と墨書された木札⁽¹⁰⁾も写真付きで紹介されており、さらに、「まじないの世界」という項

目では、溜池遺跡や丸の内三丁目遺跡で見つかった「呪符木簡」の図面も紹介している。⁽¹¹⁾

このように、江戸時代についての考古学的な考察の上で、木簡の持つ情報が活かされる場面はじょよに増えつつある。年紀のある資料としての絶対年代の情報の提供資料は、その顕著なケースであるが、そのことがクローズアップされるだけでなく、まだ顧みられていない膨大な木簡の中に、近世社会を解明できる素材は多く含まれているはずである。日常的な営みを語る資料であるはずの遺物群から、文字通り日常的な問題が読み取れないだろうか。文献史料のみではわからなかった各時代の側面のうち、木簡が明らかにしてくれる部分も多いと考える。今後の方向性として、近世社会のどのような点が明らかにできるのか、木簡ならではの特性を見定めていく必要があると考える。

木簡の資料的価値をはつきり認識し、その位置づけを重要なものとしていくためには、木簡の特性が活かされた事例研究によって、その価値が明瞭になることが期待される。年紀のある資料として遺物群および遺構の年代を決定するカギとなる木簡は、近世木簡の一部である。いっぽうで、多くの木簡は廃棄物すなわちゴミであり、一般的にはその当時の社会の日常の側面を語るものである。事例研究においては、そうした近世社会の日常的な面を語るはずの資料から、どのようにして明らかにされるべき日常の姿を見出していくかが、もつとも大きな課題であろうと思われる。

本稿で繰り返し述べてきたように、個々の木簡の調査にあたって、それがどのようなものであるのかということを確認するためには、体系的な枠組みの中のどの類別にあてはまるのかといった視点が必要である。木簡そのものが、廃棄の際の処理や土中での状態によって欠損し、完形でない状態で出土することも多いことから、一部の断片からでもどの類別に属するののかという認識が得られるための体系を構築することは、今後の研究の進展のために必要である。本稿でも述べたように、形態と書き込まれる情報のパターンがわかっていないと、一点一点について多様な可能性を考えながら方向の定まらない検討に時間を費やすことになり、ひいてはその煩雑さが研究の進展を阻害することになる。多くの出土例があることは、むしろその体系を考える材料は存在するということである。

しかしながら、体系の構築が容易ではないことも確かである。紙の文書の場合、古代の文書に比べて、近世の文書は多様に発展し、さまざまな形態をもって分化している。古代・中世の文書をもとに構築された古文書学の枠組みが、近世社会の一部を考察する上で役立つ部分もあるものの、それ以外に近世独自の枠組みが模索されなければ近世古文書学と呼べる研究分野は確立し得ない。近世文書の体系化は、その史料の量の膨大さからも非常に困難であり、共有されるような全体の体系の提示はまだ途上といってもよい。文筆の発展した近世社会にあつては、木簡もまたすぐれて発展した状況にあると考えられ、その体系化にはかなりの作業量を要することが推測

される。しかしながら、古代の木簡研究において、ある程度体系が共有された後にも新発見の木簡から新規の類別を見出していったように⁽¹²⁾、ある程度の段階を見通せたところでの体系の提示と共有、そしてその後の事例検討による検証という過程は必要であろう。

こうした体系化を考える上で、隣接する資料群分野の体系を参照にすることは有用であろう。時代的には近世の前後にあたる中世や近代の資料の体系である。近代木簡については、近世木簡よりもさらに研究は遅れており、参考にできるとすれば中世木簡の体系となる。ところが、中世木簡の体系化については、草戸千軒木簡が出土した時期に研究が進展したものの、その後はあまり多く議論されてはいないように思われる⁽¹³⁾。中世の木簡をどのように体系化して認識するのか、その視点からの研究は停滞している感がある。近世木簡の研究が進みにくくなっている一つの要因として、そのことも関係しているだろう。中世木簡の体系についての認識がより浸透していれば、それとの比較で議論が起ころうともあると考えられるが、現実にはそのような視角はあまりとられていない。木簡学の分野における体系の点でも、主に古代の木簡を材料とした体系が共有されており、その中に中世木簡の研究成果はほとんど組み込まれてはいない。筆者の研究グループでも古代の木簡の体系はすでに認識してはいるが、どう考えても中世木簡の体系を認識したほうが有用であるという結論で一致した。中世木簡の出土点数は、近世木簡に比べてはるかに少ないが、近世木簡と比較する上では形態の面でも

機能の面でも、古代の木簡よりも近い存在であることは間違いない。したがって、中世木簡の体系化が停滞していたとしても、個別の資料群についての研究状況を把握し、近世木簡を考察する上での手掛かりとしていくことも必要であろう。

おわりに

以上、拙い内容ではあったが、近世木簡を集中的に検討するという試みを続けてきた中での問題点を中心に、報告書のスタイルに由来する問題点と今後の課題、また実物の検討から考えられる今後の方向性について、研究動向という形でを紹介を試みた。

筆者を中心にしたグループは、実物調査の経験をさらに積み重ねながら調査方法を共有し、また資料検討を積み重ねながら研究方法についても共有するという営みを続けていくことで、近世木簡の歴史資料としての可能性を多様な側面においてさらに切り開いていきたいと考えている。今後の資料研究を通して、木簡によって初めて明らかになる近世社会の側面に光をあてることのできるであろう。近世出土文字資料全体の中における資料としての木簡の位置づけや、日本における古代から近代までの木簡の歴史の変遷における近世木簡の位置づけについても、今後の知見を増やしていく中で考えていきたい。

注

- (1) 出土文字資料の扱いに関する筆者の考え方は、鐘江宏之『地下から出土した文字』（日本史リブレット15、二〇〇七年、山川出版社）を参照されたい。
- (2) 以下の分類は、現在の発掘調査報告書でおおむねとられている分類を示している。
- (3) 小川望『焼塩壺と近世の考古学』（二〇〇八年、同成社）
- (4) 以下の記述は、主に東京都埋蔵文化財センター編『汐留遺跡Ⅰ』（一九九七年）、同編『汐留遺跡Ⅱ』（二〇〇〇年）、同編『汐留遺跡Ⅲ』（二〇〇三年）、同編『汐留遺跡Ⅳ』（二〇〇六年）を利用しての検討を踏まえたものである。
- (5) 江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究事典』（二〇〇一年、柏書房）
- (6) 注(5) 前掲書、三六二〜三六六頁。
- (7) 東京大学遺跡調査室編『東京大学本郷構内の遺跡—医学部附属病院地点 医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』（一九九〇年）
- (8) 古泉弘編『事典 江戸の暮らしの考古学』（二〇一三年、吉川弘文館）
- (9) 注(8) 前掲書、四〇〜四二頁。
- (10) 注(8) 前掲書、八六頁。
- (11) 注(8) 前掲書、二五七〜二五八頁。
- (12) 例えば、一九八〇年代になって各地で封緘木簡が発見されたことによって、木簡学会で使われている形式分類に、封緘木簡独自の形式番号が新たに加えられたことを挙げることができる。
- (13) 中世木簡の系統についてもっとも整理がなされているのは、おそらく水藤真氏の業績においてであり、水藤真『絵画・木札・石造物

に中世を読む』（一九九四年、吉川弘文館）、同『木簡・木札が語る中世』（一九九五年、東京堂出版）にその枠組みを窺うことができる。

付記 本稿は二〇一五年度〜二〇一七年度人文科学研究共同研究プロジェクト「江戸・東京の木簡についての歴史資料的研究」による成果の一部である。

ENGLISH SUMMARY

Japanese Early Modern Wooden Document Research: A Comparison with Japanese Ancient Wooden Document Research

KANEKAE Hiroyuki

Remains of Japanese early modern wooden documents are increasingly being found by excavation in modern cities. However, study of them is not readily advancing. There are various factors for this. There are few studies about wooden documents that were developed mainly on ancient wooden documents. And there are many points that would improve the investigation. In addition, it becomes an important problem to think about a system of wooden documents in the early modern times to examine individual wooden documents. We need a system of wooden documents of the Middle Ages, not of ancient wooden documents, while referring to the study of early modern wooden document. And it is necessary to continue and to inspect. On the history study, the points that can know the absolute year are utilized, but most of the wooden documents are everyday refuse. Wooden documents could be examined to help elucidate the daily life of the past. We should aim at case studies to clarify the everyday life of the past.

Key Words: Wooden documents, Edo period, Exhumation letter document, Daily life, Excavation report

